令和3年度滋賀県埋蔵文化財発掘調査成果報告集

土の中から歴史が見える 2021－最新の発掘成果から－

（第 117 回滋賀県埋蔵文化財センター研究会）

1. 里西遺跡［大津市］　（公財）滋賀県文化財保護協会

2. 出庭遺跡［栗東市］　（公財）滋賀県文化財保護協会

3. 小柿遺跡［栗東市］　（公財）栗東市スポーツ協会

4. 福林寺古墳群［野洲市］　（公財）滋賀県文化財保護協会

5. 貴生川遺跡［甲賀市］　甲賀市教育委員会

6. 塚本遺跡［彦根市］　彦根市

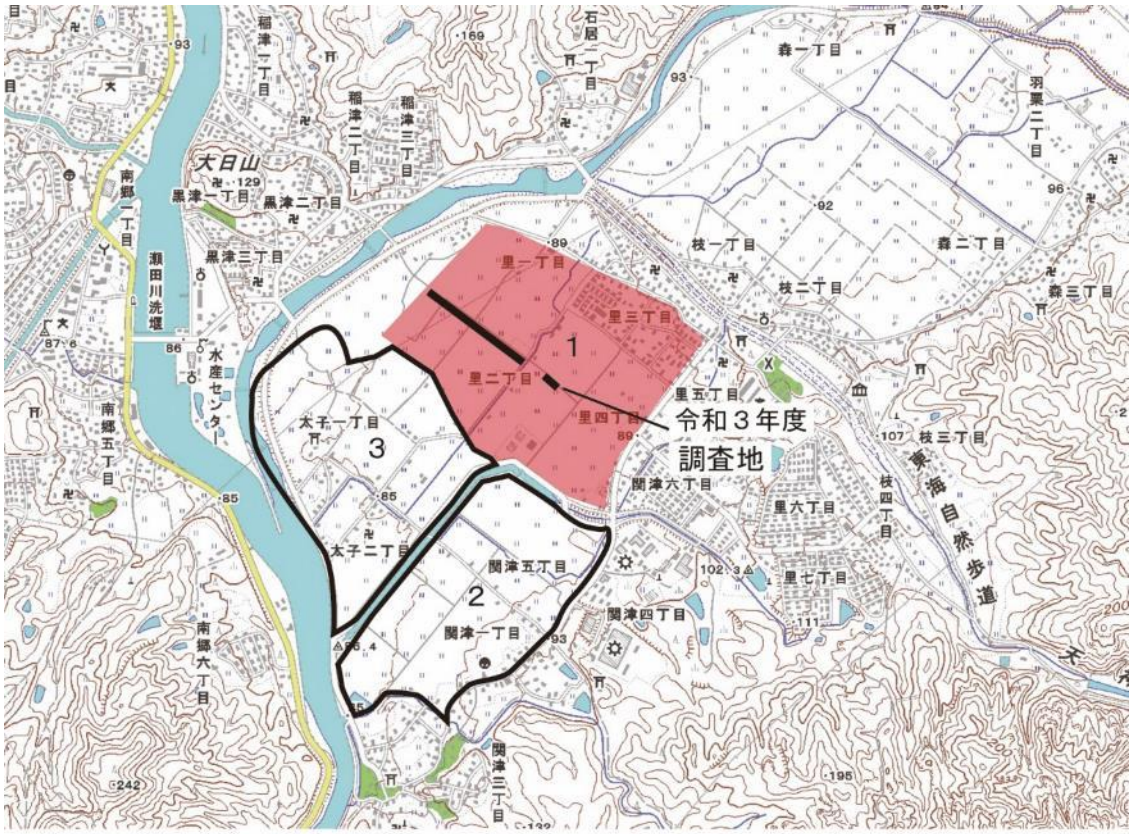
7. 名勝旧秀隣寺庭園［高島市］　高島市教育委員会

令和４年（２０２２）３月

滋賀県埋蔵文化財センター

１.里西遺跡　～中世の屋敷跡を発見～

遺 跡 名：里西（さとにし）遺跡
所 在 地：大津市里地先ほか
時　　代：弥生時代後期・鎌倉～室町時代前期
調査面積：３,６７９.８６㎡
調査期間：令和３年４月１日～令和４年３月２５日
調査原因：南郷桐生草津線補助道路整備工事
調査機関：公益財団法人滋賀県文化財保護協会
報告者名：田中　咲子



１．里西遺跡　　２．関津遺跡　　３．太子遺跡

遺跡の位置（1/25,000）

調査の概要

里西遺跡は、琵琶湖から流出して南下する、瀬田川の東側に位置しています。遺跡が立地する場所は、現在も水田地帯が広がる、大戸川などの河川によって形成された田上平野にあたります。

里西遺跡の南に広がる田上山は、藤原京造営の時期から中世に至るまで、公的な造営を支える良質な木材の山地でした。里西遺跡の南西側に隣接する関津遺跡からは、石山寺造営に際して設置された田上山作所の関連施設である可能性

が高い建物群が検出されていますが、切り出された木材の多くが瀬田川を下り大和（奈良）方面へと運ばれました。

中世には、田上地域に牧庄・中庄・杣庄などの荘園が存在したことが知られています。関津遺跡からは、平安時代後期～鎌倉時代頃の大規模な集落跡が検出されています。

里西遺跡の今回の調査は、南郷桐生草津線補助道路整備工事に伴い実施したもので、調査区全体にわたって、鎌倉時代から室町時代前期頃の集落跡を検出することができました。また、２棟のみですが弥生時代の竪穴建物を検出しています。里西遺跡の西側には、弥生時代後期を中心とする太子遺跡が位置していますが、当遺跡にも弥生時代の遺構が広がることが確認できました。

【弥生時代】

遺構・遺物

調査地の南側で竪穴建物を２棟検出しました。竪穴建物１（写真１）は、南北4.0mの隅丸方形のもので、残存する深さは約５㎝を測ります。遺物は、弥生土器の細片が出土しています。

竪穴建物２（写真２）は、竪穴建物１の南側に約 14m離れた地点で検出しました。建物の南辺と西辺は調査区の外に延びると考えられ、竪穴建物２と同様に、隅丸方形のものであると考えられます。東西 6.5m以上・南北 4.5m以上・深さ約 20 ㎝を測ります。床面の近くに石材がコの字型に３つ置かれていました（写真３）。内部の埋土に焼土がわずかに認められたため、この石囲いの部分は炉として機能した可能性があります。遺物は、北西側の床面に近いところから、弥生時代後期の甕や鉢などがまとまって出土しています（写真４）。

【鎌倉時代・室町時代前期】

遺構

調査区全体（全長約 400m）にわたり、屋敷地が集合する集落跡を検出しました。それぞれの屋敷地は、区画溝と呼ばれる浅い溝で区画され、屋敷地の東端に沿って水田を潤すために必要な灌漑用水路が掘削されていました。屋敷地と灌漑用水路は、東に 40 度傾く条理地割に向きを揃えて造られていました。屋敷地の内部には、掘立柱建物による主屋や小屋が建てられ、井戸や何等かの機能をもつと考えられる土坑が掘削されていました。

①屋敷地（写真５）

調査区の南端からは、区画溝に囲まれた屋敷地を良好な状態で検出しています。屋敷地は南北に並んで２か所検出しました。検出した区画溝は、いずれも屋敷地の東側にあたり、西側は調査区外に広がっていると考えられます。北側の屋敷地については、南北の規模が約 26mであったことがわかりました。区画溝は、幅 0.6～2.3m、深さ 0.3～0.6mを測ります。

この遺構よりも古い時期の遺構が重複して見つかっていることから、屋敷地が造られるなかで掘削されたと考えられます。

②掘立柱建物

それぞれの屋敷地内からは、掘立柱建物の柱穴とみられる遺構を数多く検出しました。建物は何回も建てかえられたと考えられます。掘立柱建物（写真６）は20 棟確認しました。柱穴の中には、柱が沈むのを防ぐために平な面をもった石を据えたもの（写真７）や礎板を据えたもの、根本に石を詰め込み柱が倒れないように工夫をしたものも多くみられました。弱い地盤に建物を建てていた当時の人々の苦労がうかがえます。

③土坑墓（写真８）

土坑墓は、中世において最もよく見られる埋葬形態で、遺体をむしろなどにくるみ埋葬したものです。調査区の北側で１基検出しています。長径 2.05m・短径 1.1m・深さ 50mを測ります。内面には、土師器の小皿が供献されていました。屋敷地に伴うことから、集落内に１基から 2 基程度作られる屋敷墓であると考えられます。屋敷墓の被葬者は、村落構成員の先祖や開発者でした。当時の人は、屋敷墓を祀ることにより、子孫の土地継承を守護してもらっていると考えていたようです。

⑤灌漑用水路（写真９・10）

調査地の東端に沿って、約 400mの長さで検出しました。この灌漑用水路は、南側にあった上流の水源から水を引きこんで流れていたようです。山地側から大戸川方向へ、徐々に幅が広く、深くなっていくように掘削されていました。

遺物

区画溝や掘立柱建物、灌漑用水路からは、多くの遺物が出土しました。出土した遺物の特徴としては、大和（奈良）から恒常的に搬入された、瓦器の椀や土師器の羽釜が多く出土することが挙げられます。この傾向は、里西遺跡の南西側に隣接する関津遺跡でも同様にみられます。この頃の大和は、平氏の焼き討ちにあった東大寺の再建事業が行われるなど、中世奈良町の復興期であり、建築物資の需要が高まった時期にあたります。関津にあったとされる河津は、この時期も田上山の山林資源を、水運を利用して大和に運ぶための重要な要港であったと考えられます。里西遺跡と関津遺跡で出土した大量の大和型の瓦器椀や土師器の羽釜は、こうした大和地方との深い関わりの一端を示すものであると推定されます。

その他の特徴としては、周辺の同時期の遺跡に比べて、輸入陶磁器の占める割合が高いということや、石鍋の出土点数が多いということが挙げられます。このうち、石鍋については、当時の記録（東大寺文書　天承元年六月二日・1131 年）によると、石鍋４個が牛 1 頭と同等の価値があったことがわかっていて、非常に高価なものであったことが窺えます。

写真１　竪穴建物１（北東から）【弥生時代後期】

写真２　竪穴建物２（北東から）【弥生時代後期】

写真３　竪穴建物２に作られた炉（北西から）【弥生時代後期】

写真４　竪穴建物２出土遺物（北東から）【弥生時代後期】

写真５　検出した二つの屋敷地（北西から）【鎌倉時代～室町時代前期】

写真６　掘立柱建物（北西から）【鎌倉時代～室町時代前期】

写真７　掘立柱建物に据えられた石（東から）【鎌倉時代～室町時代前期】

写真８　土坑墓（北西から）【鎌倉時代～室町時代前期】

写真９　灌漑用水路（左側）（北西から）【鎌倉時代～室町時代前期】

写真 10　灌漑用水路断面（南東から）【鎌倉時代～室町時代前期】

２.出庭遺跡　～古墳時代前期の鍛冶工房群～

遺 跡 名：出庭（でば）遺跡（事業名：辻遺跡）
所 在 地：栗東市出庭
時　　代：古墳時代前期
調査面積：９,４００㎡
調査期間：令和３年６月～令和４年３月
調査原因：国道８号野洲栗東バイパス工事
調査機関：公益財団法人滋賀県文化財保護協会
報告者名：重田　勉

遺跡の位置（1/25,000）

調査の概要

辻遺跡（出庭遺跡）は、古墳時代の大集落跡として知られています。公益財団法人滋賀県文化財保護協会では、滋賀県教育委員会の依頼を受け、国土交通省近畿地方整備局滋賀国道事務所が工事を実施している一般国道 8 号野洲栗東バイパス建設に伴う発掘調査を平成 30 年度から実施しています。

これまでの調査では、玉作りなどの手工業工房跡や、多数の遺構がみつかっています。令和元年度の調査では、古墳時代中期前半(5 世紀前半)の鉄鍛冶工房集落跡がみつかり、鉄製品や韓式系土器などが出土しています。

辻遺跡は広域にわたる遺跡であるため、令和３年７月からは栗東市出庭に含まれる範囲を出庭遺跡と改称することになりました

遺　構

今回の調査地点は、令和元年度に古墳時代中期前半の鉄鍛冶工房がみつかった地点から、南方約 800m の地点に位置します。

今回の調査では、古墳時代前期の竪穴建物が 20 棟以上みつかりました。その中でも 4 棟の竪穴建物群については、床面に強い被熱痕がみられ、鉄鍛冶工房跡と考えられます。これら竪穴建物は、方形の平面形状を呈し、一辺 5m 程度通常規模のものと、一辺３m 程度の小型のものがあります。いずれも床面には強い被熱痕があり、床面南隅には方形の土坑があります。

床面にある被熱痕は、方形や不整形の平面形状で、同心円状に変色がみられました。特に中央が強く硬く焼けしまり、橙色に変色していました。周囲はにぶい赤色に変色していました。おそらく 1000℃前後の高温にさらされていたと考えられます。焚火程度ではこれほど強い被熱にはならず、何らかの方法で強勢送風しながら、炭火を焚いていたと考えられます。

このような高温状態が必要な作業として考えられることとしては、陶器の焼成・銅製品の鋳造・鉄鍛冶の可能性が挙げられますが、古墳時代前期には陶器の技術がないことや、銅滓や銅製品が出土していないことから、鉄鍛冶が行われていたと考えられます。

遺　物

4 棟の内の 1 棟から鉄製品が 2 点出土しています。1 点は棒状で、もう 1 点は板状のもので、用途は分かっていません。その他、敲石や微細な鉄片が出土しました。微細な鉄片は、ルーペや顕微鏡を用いて、初めて分かるほど小さなものでした。

金属探査

鍛冶遺構としては物的証拠となる出土遺物が少ないこともあり、金属探知機を用いて、土中に溶けだした金属の反応を探査しました。その結果、炉本体ではなく、炉の周囲に反応が分布することが分かりました。この分布状況が意味することは、現時点では不明です。少なくとも古墳時代では貴重な鉄が、竪穴建物で扱われていたことが分かり、鉄鍛冶が行われていたことが明らかといえます。

おわりに

今回の調査の結果、当遺跡では古墳時代前期から鉄鍛冶が行う集落跡が存在したことが明らかとなりました。鍛冶関係遺構から出土する遺物の全てが出土したわけではなく、具体的にどのような鍛冶の作業が行われていたかは、分から

ないことは多いのですが、鍛冶炉の被熱具合からみて、炉内の温度をかなり高く上昇させる技術が導入されていたことが明らかとなりました。

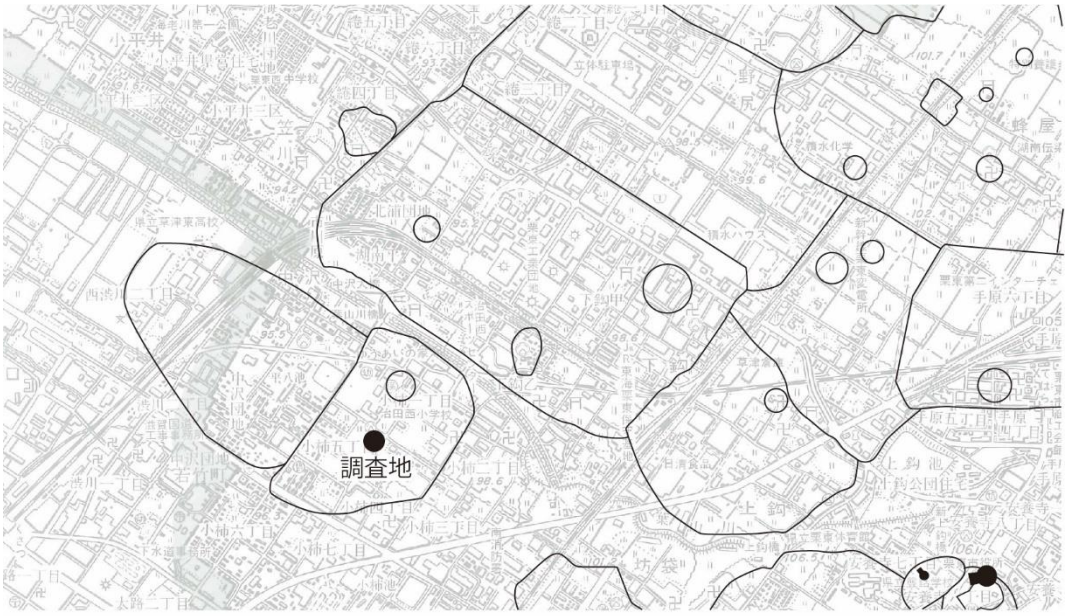
鉄鍛冶の技術は、弥生時代に日本に入って来ますが、技術や内容については不明な点が多いのが現状です。今回の調査成果は古代の鉄鍛冶の技術的な歴史を考えていく上で、欠かせない調査例になるといえます。

写真１　４基の鍛冶炉をもつ竪穴建物 16

写真２　１人用？の鍛冶工房

３.小柿遺跡　～河川から木製品と埴輪が出土～

遺 跡 名：小柿（おがき）遺跡
所 在 地：滋賀県栗東市小柿五丁目 385 番、386 番、387 番地先
時　　代：古墳時代、飛鳥時代～奈良時代、平安時代～鎌倉時代、近世以降
調査面積：３９３．４８㎡
調査期間：令和３年１月１２日～令和３年１２月３日
（現地調査：令和３年３月５日終了）
調査原因：共同住宅建設
調査機関：公益財団法人栗東市スポーツ協会
報告者名：近藤　広



遺跡の位置（1/25,000）

調査の概要

遺構

①古墳時代

河川ＮＲ１

調査区の東南端から北西方向に向かって蛇行しながら延びる河川である。大きさは、検出長約 58m、幅約４～７ｍ、深さ約１ｍ前後である。南端から約 10m北側方向に行った場所が河川の屈曲する部分で木器が多量に出土している。（その西側に接して杭を打ち込んだ土坑状(2.0×2.6m、深さ約 20～30 ㎝)の部分があり、梁状の施設であった

ことが推測される。また北西側は北側で円形周溝のごとく屈曲して西側にのびる部分と、ゆるやかに西側にのびていく流れが存在している。その二つの流れが交差する部分で土器と木器がまとまって出土している。また円形周溝のごとく屈曲する、ＮＲ１西側肩口の上層にあたる部分も円形周溝状（検出長約７ｍ、幅１．0～1.4ｍ、深さ 40～48 ㎝）になっており、多量の埴輪が廃棄されていた。

ＮＲ１の時期は、下層がおおむね古墳時代前期（庄内式新段階から布留式併行期）、溝としたＳＤ２を含めた上層が飛鳥時代から奈良時代初頭頃と推定される。

②飛鳥時代～平安時代

溝ＳＤ２

調査区南東側のＮＲ１西側肩口よりに形成された溝である。古墳時代の河川ＮＲ１がほぼ埋まって、その上層にあたる部分が溝となって存在していた。調査区南端から屈曲しながら北西方向にのびていく。検出長は約 26ｍ、幅約 2.5～3.4ｍ、深さ約 54 ㎝である。時期は、出土した土器から 7 世紀に形成され、8 世紀前半に埋没したと推定される。

掘立柱建物ＳＢ１

調査区北西端南側に存在する掘立柱建物で、現状桁行２間（5.0ｍ）以上、梁行２間（4.8ｍ）の建物である。重複関係は、古墳時代から飛鳥時代（３～７世紀）の河川がほぼ埋まった段階で築造されている。時期は出土した遺物からおおむね 8 世紀末～9 世紀頃の建物と推定される。

③近世以降

井戸ＳＥ１５

平面形は円形で、大きさ径南北 3.2ｍ、東西 2.9ｍ、深さ約 1.8ｍである。井戸枠は約 1.1ｍ下げた地点で確認され、竹によって組まれたものを使用している。３～5 ㎝幅の竹を円形状に積み上げて、縦方向の竹を一定の間隔（約 10 ㎝前後）をあけてしばりつけて作成したもので、大きさ、長径 1.6ｍ、短径 1.4ｍ、高さ 70 ㎝である。井戸枠の直ぐ上から東西方向に太さ 5 ㎝ほどの木が６本ほど並べていた。使用しなくなった井戸に落ちないように蓋をしていた可能性がある。その西側にあたる部分は段になって少し広くなっている部分が存在し、4 枚の板が 20～30 ㎝の間隔を置いて４枚並べられていた。水の組み場に係るものであった可能性がある。時期は、出土した信楽産の鉢や瀬戸美濃系の陶磁器小片から 19 世紀以降の所産と推定される。

遺物

（１）土器

3～4 世紀（庄内から布留式併行）の土師器

7 世紀（飛鳥時代）を中心とする須恵器

近世以降の信楽、瀬戸美濃陶磁器ほか

（２）埴輪

埴輪(円筒埴輪、朝顔型埴輪)

(3)木器

建築部材、木錘、槽、梯子

(4)石器

石鏃、石斧

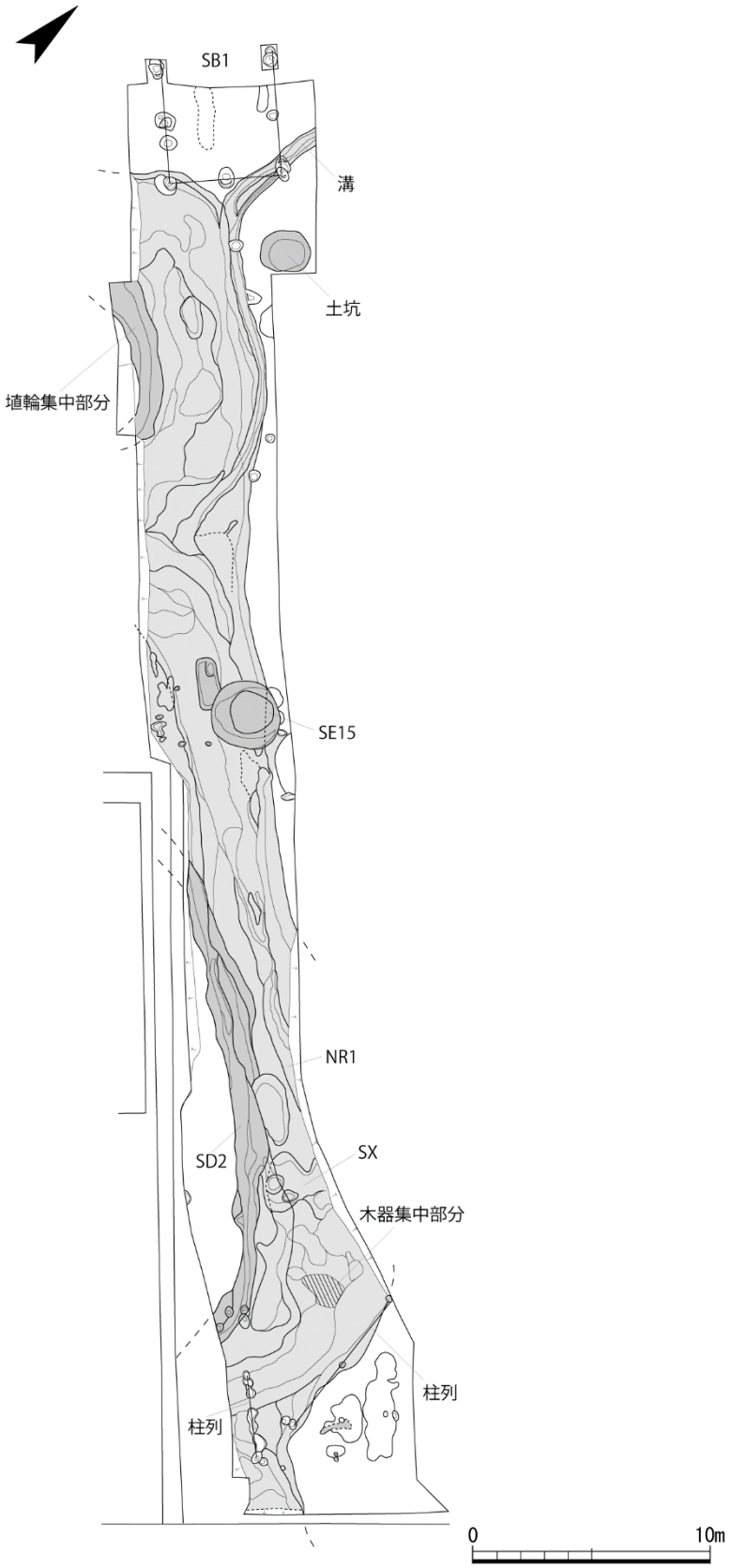
まとめ

今回の調査では、注目されるのは、古墳時代の河川からまとまった木器が出土したことと、7 世紀代と推定される河川の上層に相当する溝から多数の埴輪が出土したことである。

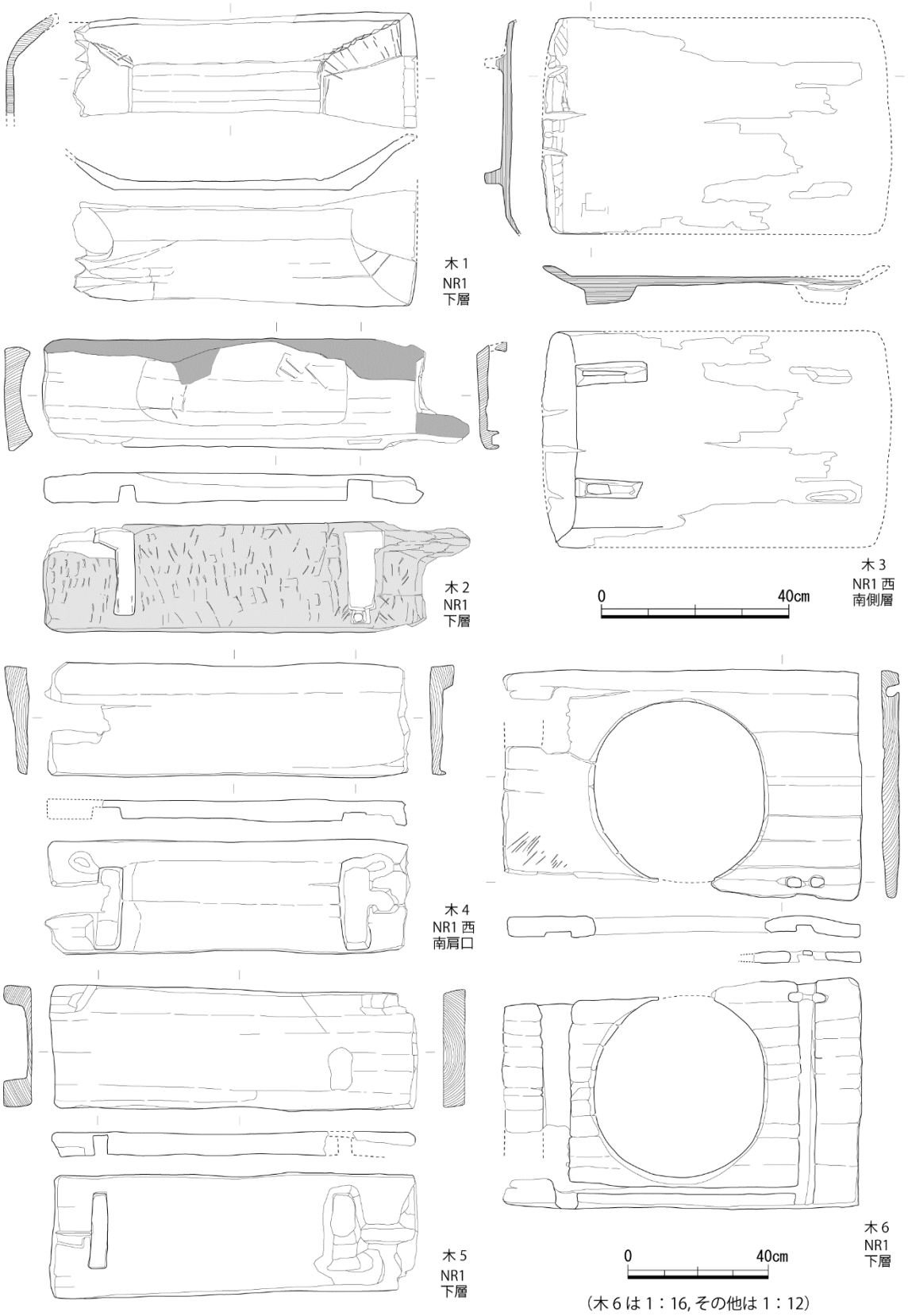
木器については、用途がはっきりしない建築部材が何点かみられ、裏面両端に切り込みをもつ長方形の板 3 点と、中央に大きく円形に刳り貫かれた板は、長さ的に近い数値を示し、組み合わせてひとつの製品が完成するそれぞれのパーツであった可能性がある。また扉と推定されるものも大型のつくりで、付近に大型の建物が存在していたことを推測させられる。

埴輪が出土した溝の時期は、7 世紀代と推定され、埴輪自体の時期(6 世紀前半主体)より新しい遺構であることが判断される。2020 年度 2 次調査において周囲からは古墳が多数確認されていることから、おそらく 6 世紀末から 7 世紀前半にかけて行われた土地の開発に伴い、古墳を破壊し、墳丘に並べられていた埴輪も河川や溝を埋めるために廃棄されたことが推測される。

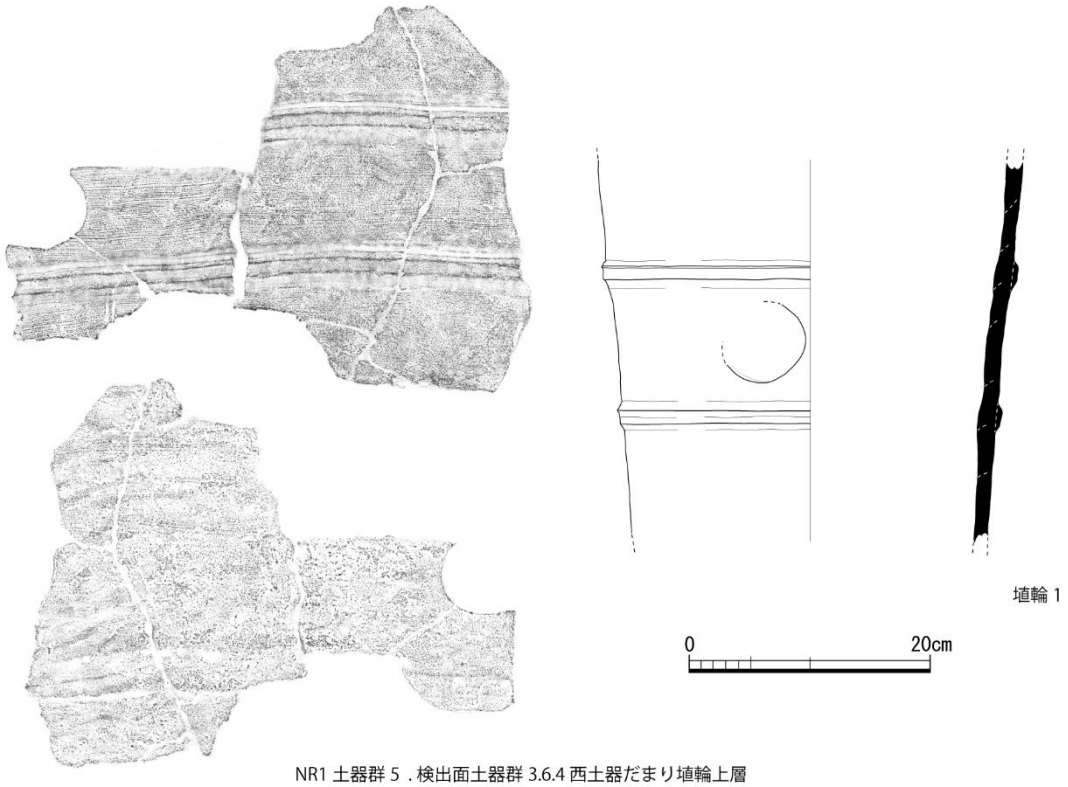
埴輪については、形態、調整に特殊なものがみられるほか、内面に煤が付着したものがみられるなど、周囲では確認されていないものが出土していることから今後類例の増加をまってその特殊性について改めて検討していきたい。



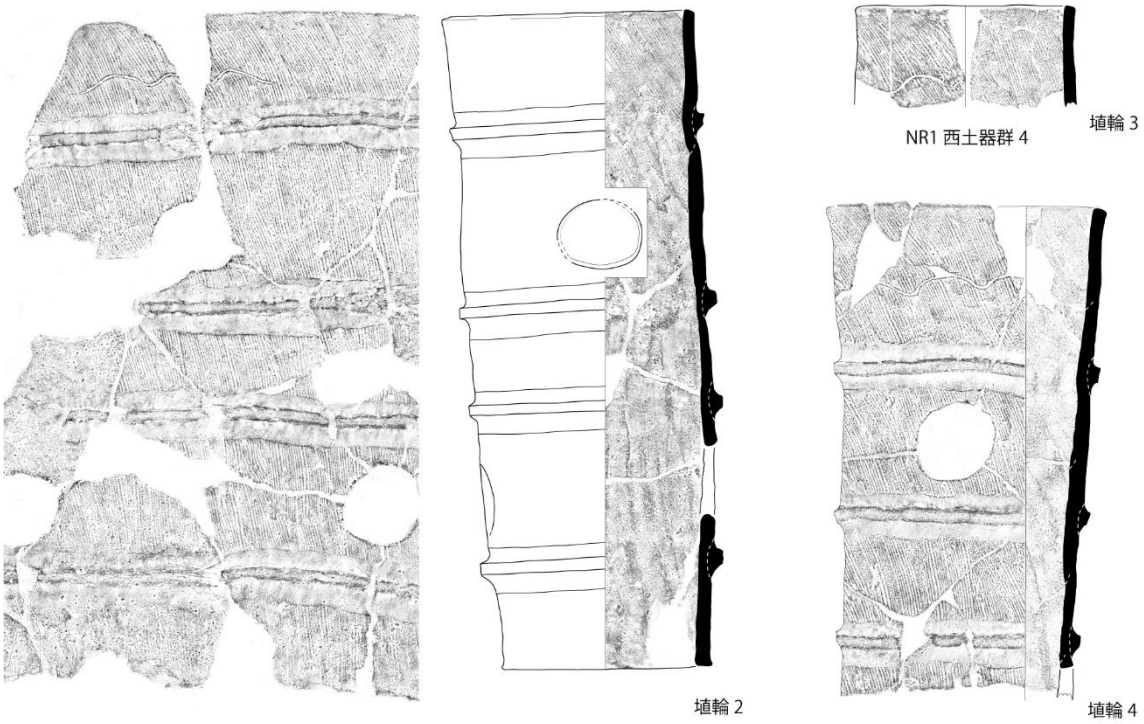
遺構平面図


木 1
NR1
下層
木 2
NR1
下層
木 3
NR1 西
南側層
0
40cm
木 4
NR1 西
南肩口
木 5
NR1
下層
木 6
NR1
下層
0
40cm
（木 6 は 1：16, その他は 1：12）

遺物実測図 1



NR1 土器群 5 ．検出面土器群 3.6.4 西土器だまり埴輪上層

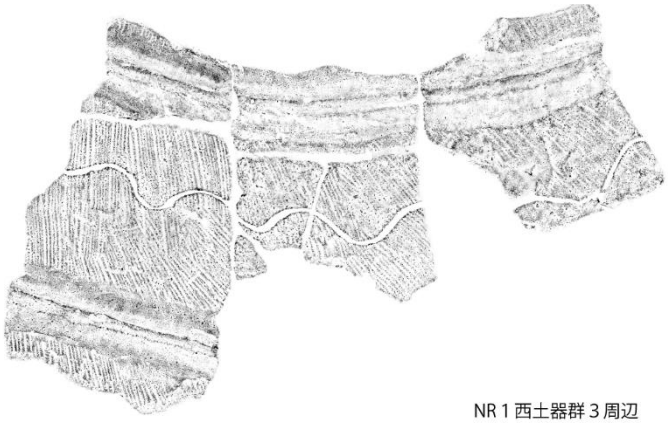


NR1 西土器群 4

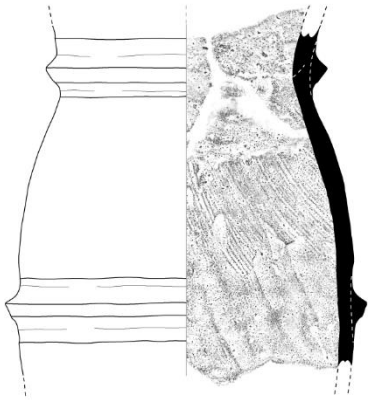
NR1 西ベルトⅣ上層土器群 2

NR1　ベルトⅣ

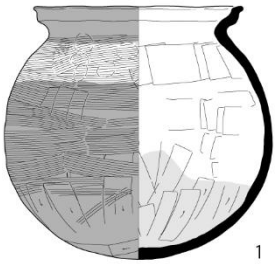
遺物実測図 2



NR 1 西土器群 3 周辺

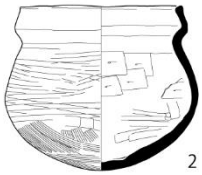


埴輪 5



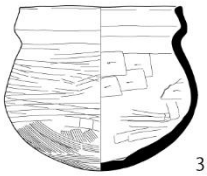
1

NR 1 中央 下層土器 3



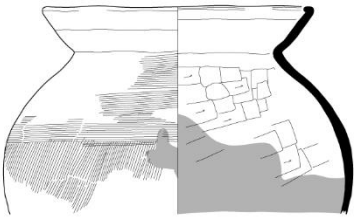
2

NR1 東 下層 土器 3



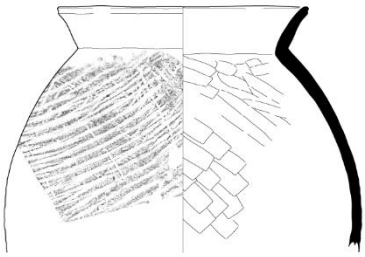
3

NR1 東 下層 土器 3



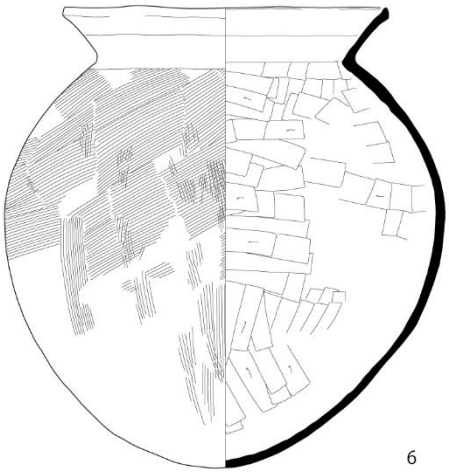
4

NR1 東 下層



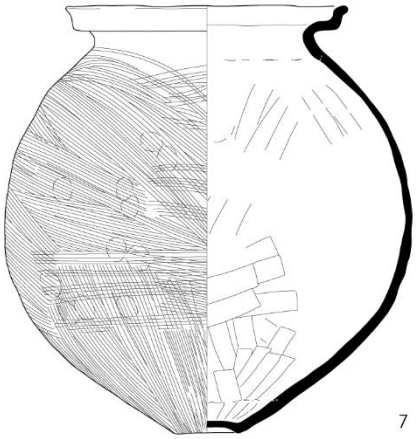
5

NR1 中央 下層



6

NR1 西ベルト下層 (写)

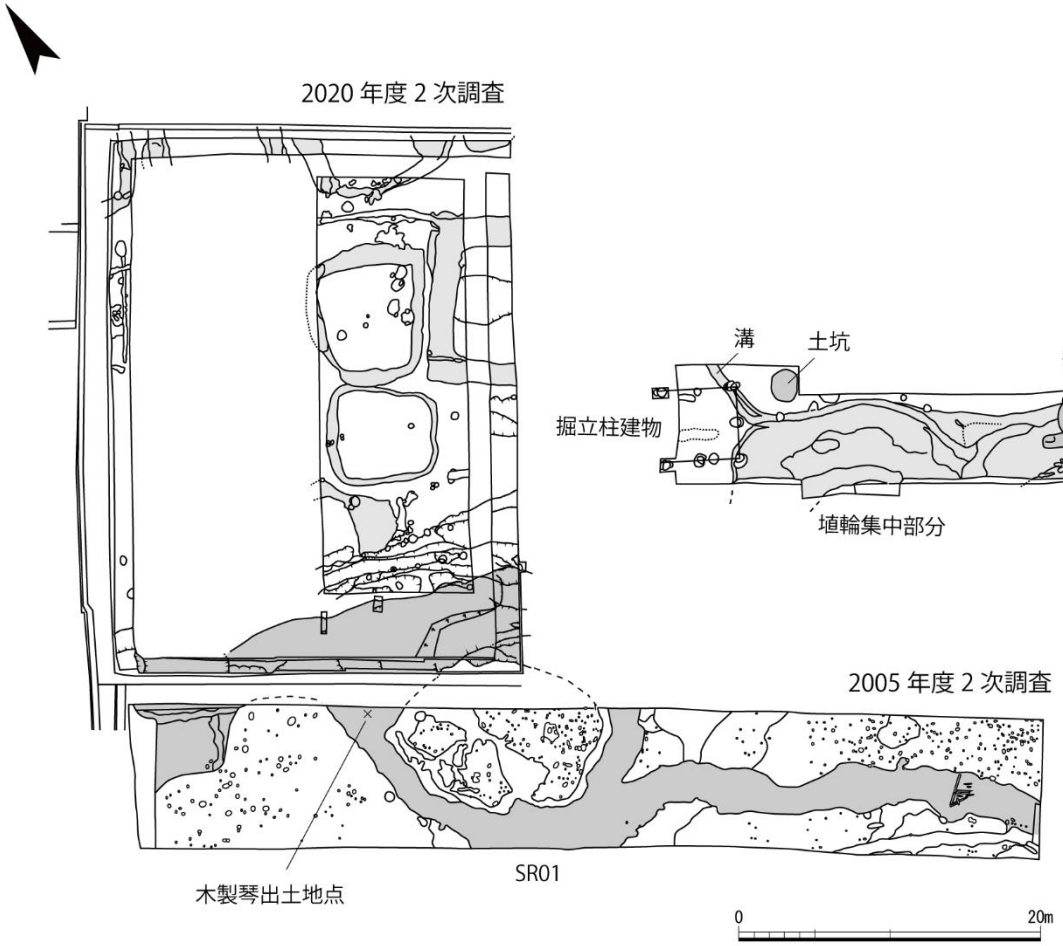


7

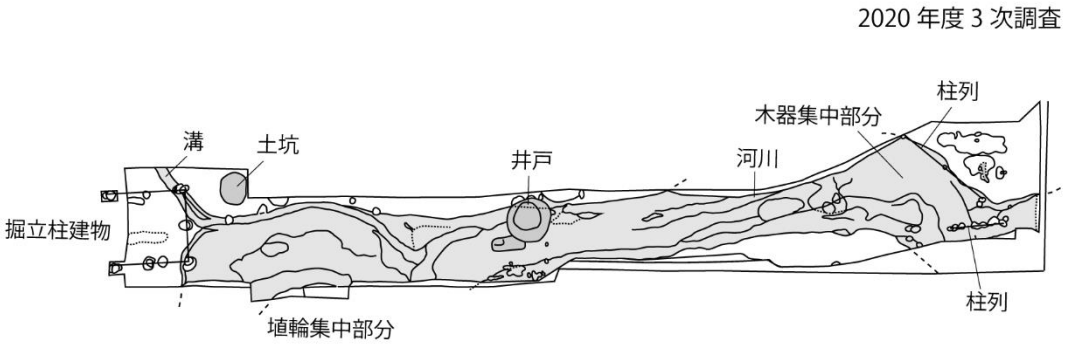
NR 1 中央下層土器 no.2(写)

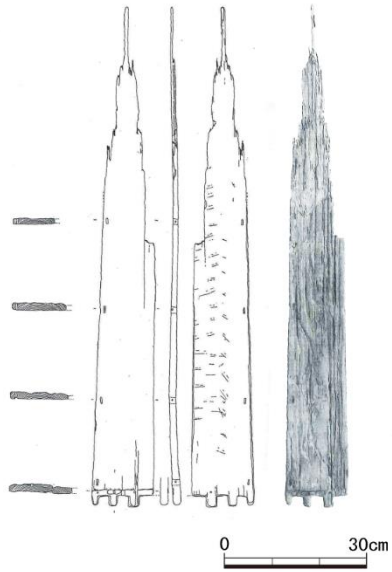
0 10cm

遺物実測図 3



調査地遺構配置図と 2005・2020 年度調査区と出土木製琴





木製琴実測図

写真１　調査地全景（北西から）

写真２　河川南端木器出土状況

写真３　河川北西側埴輪出土状況

写真４　河川北西側出土の埴輪、木器

４. 福林寺古墳群の発掘調査成果

遺 跡 名：福林寺（ふくりんじ）古墳群
所 在 地：野洲市小篠原
時　　代：古墳時代後期
調査面積：４５０㎡
調査期間：令和３年４月１日～令和４年３月２５日
調査原因：中ノ池川支流補助通常砂防（総流防）工事
調査機関：公益財団法人滋賀県文化財保護協会
報告者名：宮村　誠二

遺跡の位置（1/25,000）

調査の概要

福林寺古墳群は、野洲市南部の田中山西麓に立地します。古墳群の西側には飛鳥時代後半から室町時代頃まで存続したと考えられる福林寺跡があります。

当古墳群には 11 基の古墳(1 号墳～11 号墳)があるとされ、いずれも横穴式石室をもつ直径 10～20mの円墳とみられています。しかし、これまで発掘調査が実施されたことはなく、古墳の詳細はわかっていませんでした。

今回の発掘調査は、滋賀県南部土木事務所河川砂防課が実施する中ノ池川支流補助通常砂防(総流防)工事に伴い、令和 2 年度から実施しています。調査対象は、2 号墳と 3 号墳です。調査の結果、3 号墳の横穴式石室の詳細が明らかとなり、副葬品も出土するなど、当古墳群の評価や地域の歴史を考えるための手がかりとなる調査成果が得られました。

遺構

2 号墳・3 号墳は、東側の丘陵から派生した尾根の先端部に築かれています。

2 号墳は、残存する墳丘の形状から円墳とみられます。埋葬施設は、南西に開口する横穴式石室です。石室内の調査は実施していないため、詳細は不明です。

3 号墳は、墳丘径 12m程度の円墳とみられます。埋葬施設は南西に開口する片袖式の横穴式石室です。石室の全長は 6.5mを測ります。

石室の内部は、袖部を境にして、玄室（遺骸を安置する空間）と羨道（外部から玄室への通路）にわかれています。玄室は長さ 3.8m、幅 1.8m、天井高は 2.1mを測ります。羨道は長さ 2.7m、幅 1.1mを測ります。

石室内から土師器や須恵器、耳環、鉄鏃等の鉄製品が出土しました（写真 3）。これらは主に玄室から出土し、袖部のコーナーでは土器が寄せ集められたような状態で見つかりました（写真 4）。ただし、遺物は羨道や石室の入口付近からも出土していることから、盗掘をうけたことが窺えます。

遺物

耳環は 4 点出土しました（写真 5）。埋葬された人物が耳に着けていたものとみられます。このうち写真下段の 2 点は大きさや太さがよく似ており、一組であったとみられますが、ほかの 2 点は大きさや太さが異なります。本来は、それぞれに組み合う耳環があったと想定されるので、3 組あったと考えられます。

土師器や須恵器、鉄鏃（写真 6）も副葬品の一部と考えられます。

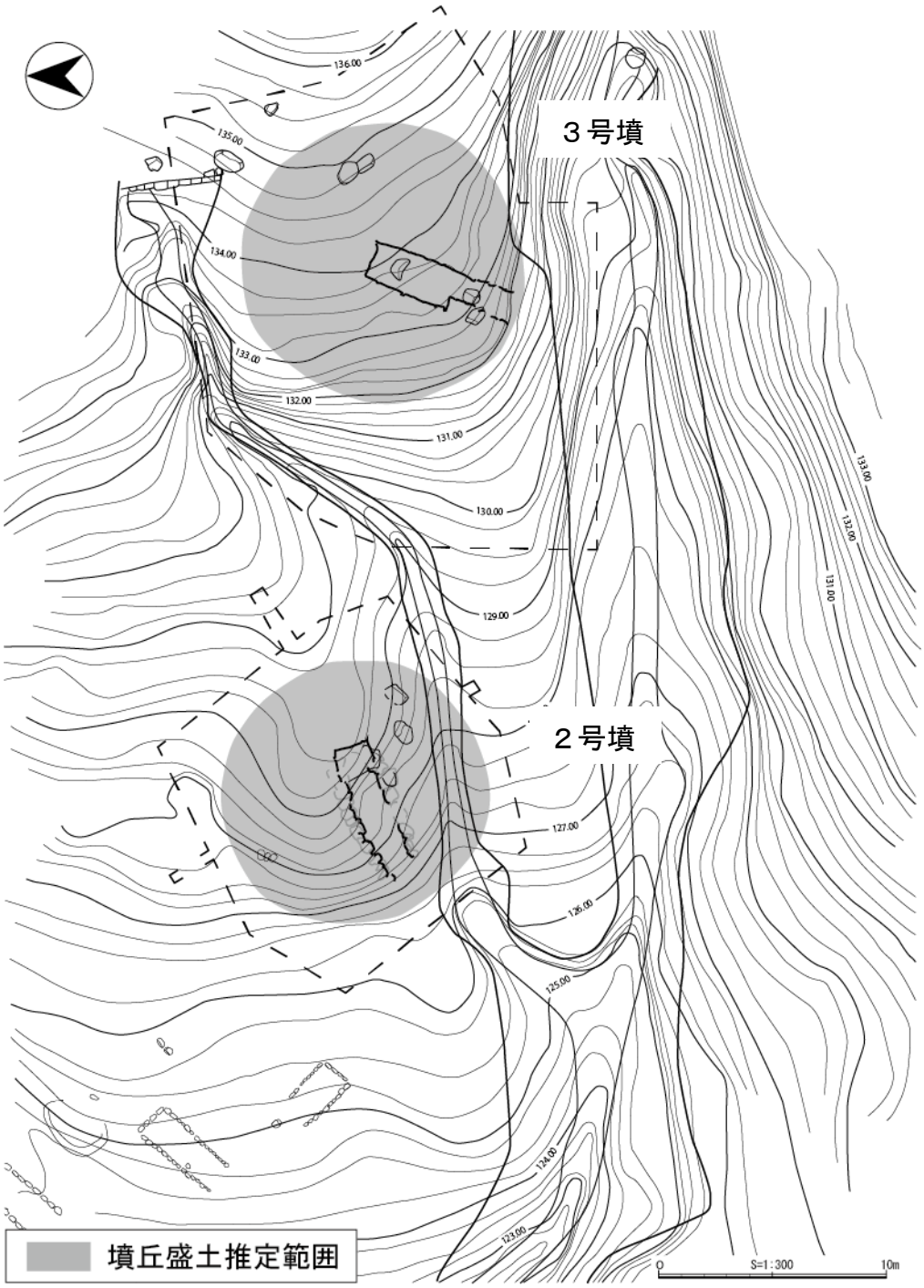
まとめ

今回、初めて福林寺古墳群を対象として発掘調査を実施しました。

調査の結果、2 号墳・3 号墳は従来から想定されていたとおり内部に横穴式石室をもつことが明らかになりました。3 号墳は石室内の出土遺物からみて、古墳時代後期（6 世紀後半～末頃）に造られたと考えられます。人骨は出土していないものの、出土した耳環の数や組み合わせを考慮すると、この古墳には複数人が埋葬されたと考えられるでしょう。

福林寺古墳群のように、一定の限られた範囲に密集する小型古墳のまとまりは群集墳と呼ばれ、これまでの研究成果から地域の有力者とその家族が埋葬されたと考えられています。

野洲では 6 世紀中頃から 7 世紀にかけて山麓部に 300 基を超える小型古墳が造られます。野洲の古墳については、地域の首長が埋葬されたとみられる大型古墳の内容が比較的よく判明している一方、群集墳を構成する小型古墳は発掘調査された例が少なく、不明な部分が多いのが現状です。今回、発掘調査により群集墳にかかる具体的な資料が得られたことは、地域の歴史を考える上でも貴重な成果といえます。



福林寺古墳群 遺構配置図

写真１　福林寺２号墳全景（西から）

写真２　福林寺３号墳の横穴式石室（南から）

写真３　３号墳の石室内部（南西から）

写真４　袖部のコーナーで見つかった土器（東から）

写真５　耳環

写真６　鉄鏃

５．貴生川遺跡第５次発掘調査

遺 跡 名：貴生川（きぶかわ）遺跡
所 在 地：甲賀市水口町貴生川
時　　代：弥生時代～安土桃山時代
調査面積：３６０㎡
調査期間：令和３年７月９日～令和３年８月３１日
調査原因：集合住宅建設
調査機関：甲賀市教育委員会
報告者名：伊藤　航貴

遺跡の位置（1/25,000）

調査の概要

貴生川遺跡は、ＪＲ草津線と近江鉄道、信楽高原鐵道が交わる貴生川駅の北東約 500mに位置しています。これまで４次にわたる発掘調査が実施されており、古墳時代中期の集落跡や平安時代から鎌倉時代にかけての溝で囲まれた屋敷跡、室町時代の単郭方形城館が見つかっています。

第５次発掘調査では、これまで確認されていなかった古墳時代後期の遺構を検出したほか、鎌倉時代の掘立柱建物を検出しました。

遺構

土坑(SK001)

調査区の南西側で検出した、長辺 1.8m、短辺 1mの長方形に近い楕円形の土坑です。深さは最深部で 0.3mを測ります。土坑内からは完形の須恵器坏身と蓋が床面に近い地点で出土しています。なお、土坑の性格については不明です。時期は古墳時代後期(6 世紀後半)と考えられます。

掘立柱建物(SB002)

調査区の北東側で検出した桁行３間(約 8.2m)、梁行３間(約 6.5m)の総柱の掘立柱建物です。平面積は 53.3 ㎡で、建物の主軸は N35° E 方向で、柱間寸法は桁行が 2.8m、3.2m、2.2m、梁行が 2.1m、2.2m、2.2mであり、柱間にばらつきがあります。柱穴は直径 30cm 前後で、深さは遺構検出面から約 20～30cm です。なお、建て替えの痕跡はありませんでした。柱穴からは瓦器が出土しており、13 世紀前半に建てられたと考えられます。

遺物

第５次調査では、土坑やピットから須恵器、土師器、瓦器、信楽焼が出土しています。

土坑(SK001)からは須恵器の坏Ｈの蓋と身が出土しています。坏身は口径 11.6 cm、器高 4.5 cmを測り、底部外面は回転ヘラケズリで調整しています。坏蓋は口径 13 cm、器高 3.7 cmを測り、天井部は低く、平らに近い形をしています。どちらも完形で出土しています。なお、時期は 6 世紀後半頃と考えられ、出土位置から身と蓋はセット関係にあると考えられます。

掘立柱建物(ＳＢ001)の柱穴からは、瓦器椀が出土しています。器面をていねいに調整しているものが多く、13 世紀前半のものであると考えられます。

まとめ

①古墳時代後期の遺構を初めて確認しました

今回検出した土坑は古墳時代後期のものであり、土坑内から完形の須恵器が出土していることから、周辺で当該時期の集落の存在が考えられるようになりました。既往の調査では、古墳時代中期の集落を確認していましたが、今回の調査によって、古墳時代中期から後期に集落が存在していた可能性が高まりました。また、古墳時代後期の集落は遺跡の東部に移ったとみられます。

杣川を挟んだ南側には、古墳時代後期に築造された「甲賀群集墳」が位置しており、造墓主体として貴生川遺跡の集落もその一つと考えられるようになりました。

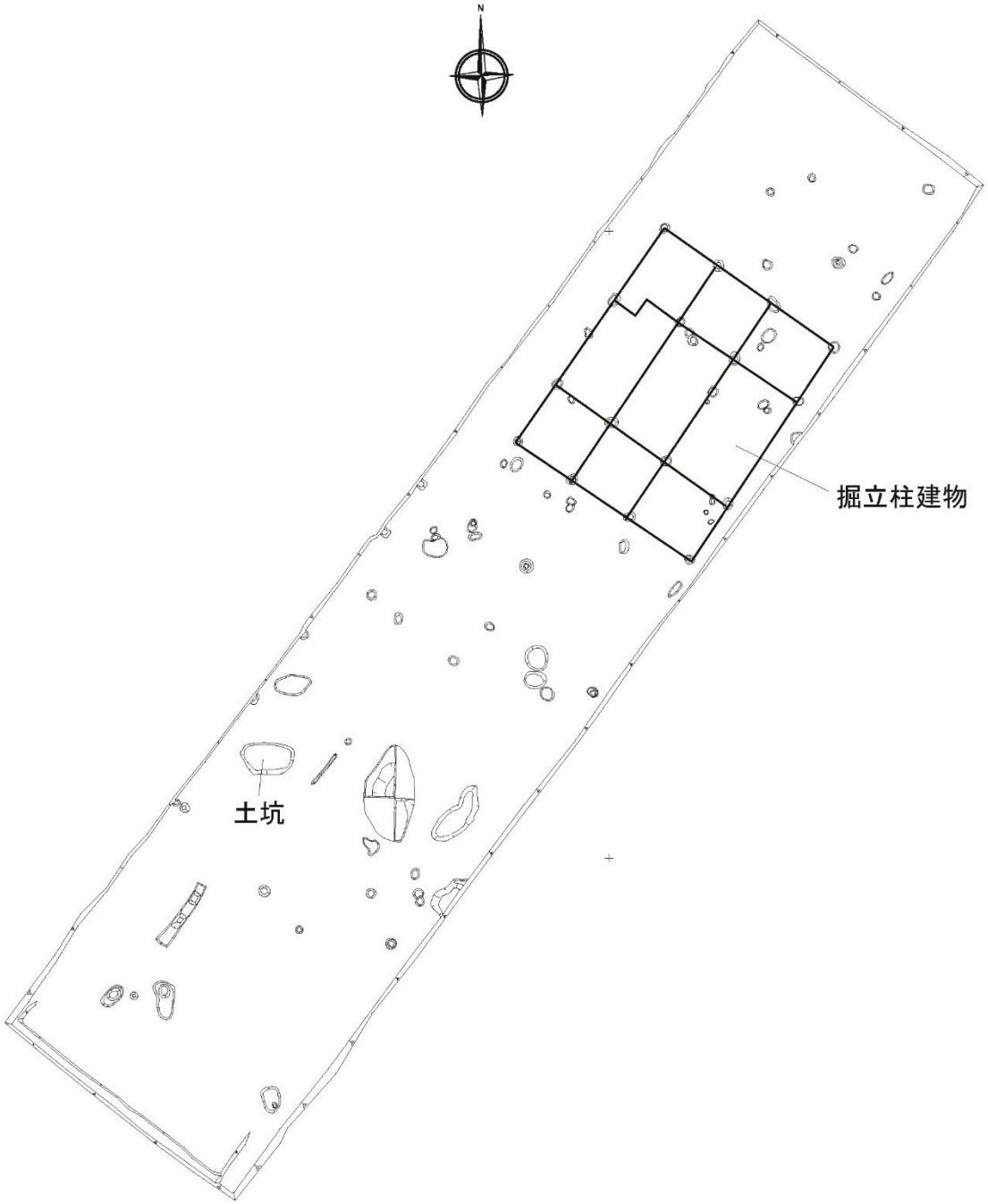
②鎌倉時代の集落の広がりを確認しました

既往の調査では、鎌倉時代の集落は遺跡の南側に集中しており、集落の北側には鋤溝跡があることから、畑地が広がっていたと考えられていました。しかし、今回の調査で、鋤溝跡よりも北側で掘立柱建物を検出し、これまで考えられてきた集落の範囲がさらに広がることとなりました。

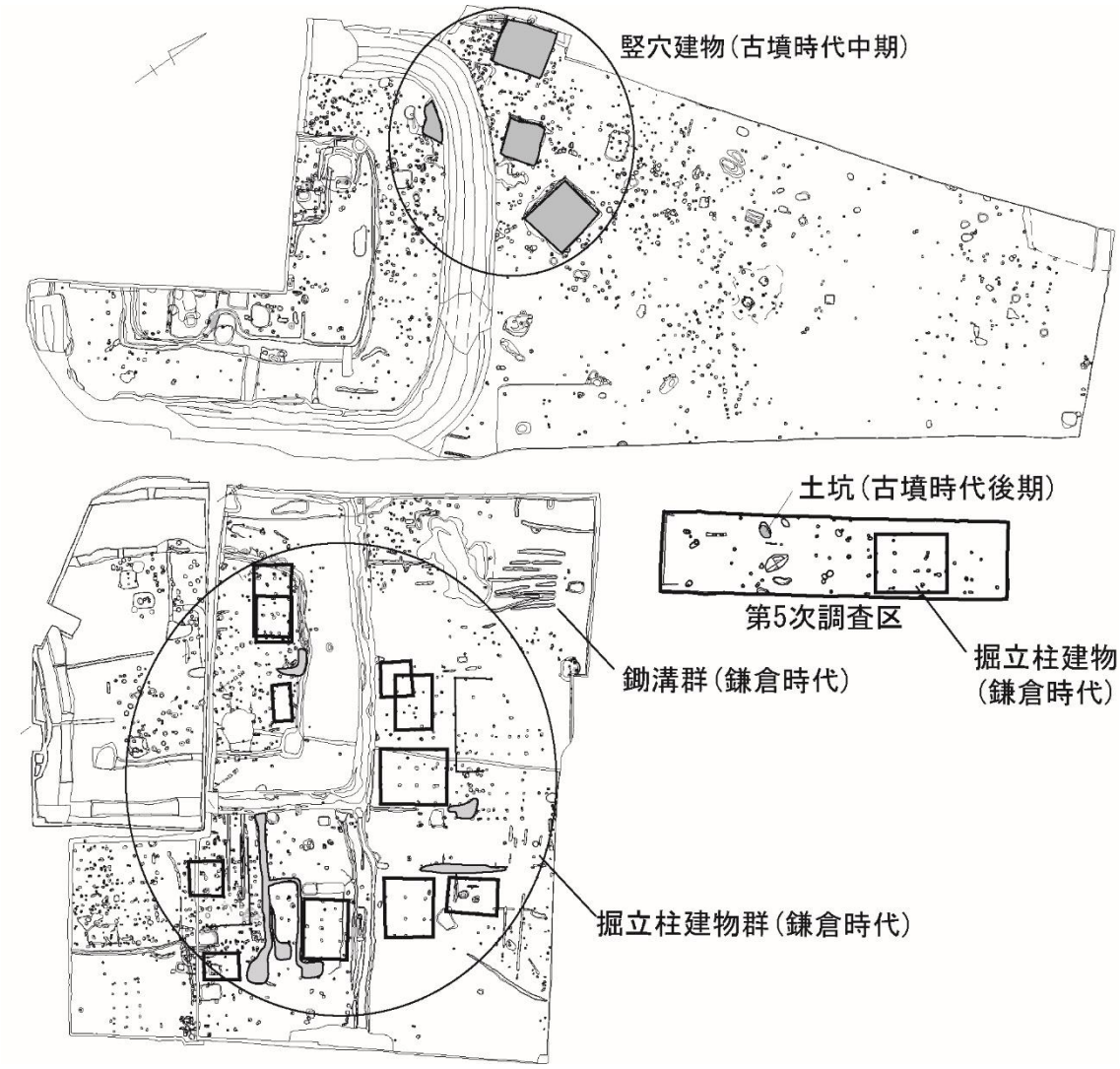
遺構図等

第５次調査
T1
T2
T3
T4
T5
第４次調査（平成 29 年度）
T1・T2：平成 25 年度
T3・T4・T5：平成 26 年度
0
200m
N
北陸線
公園
西福寺
近江鉄道
内貴公園
西内貴団地

調査区位置図



遺構平面図


竪穴建物（古墳時代中期）
土坑（古墳時代後期）
第5次調査区
掘立柱建物
（鎌倉時代）
鋤溝群（鎌倉時代）
掘立柱建物群（鎌倉時代）

貴生川遺跡全体図

写真１　調査地遠景(北から)

写真２　調査区全景

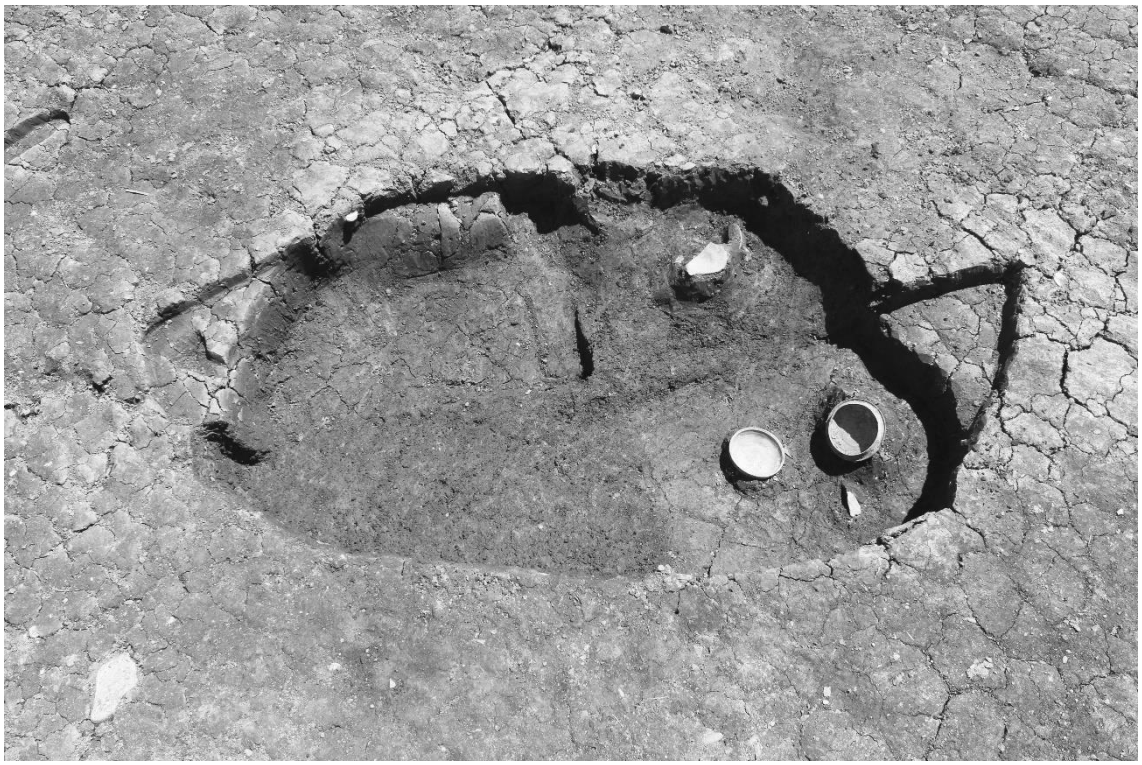


写真３　土坑

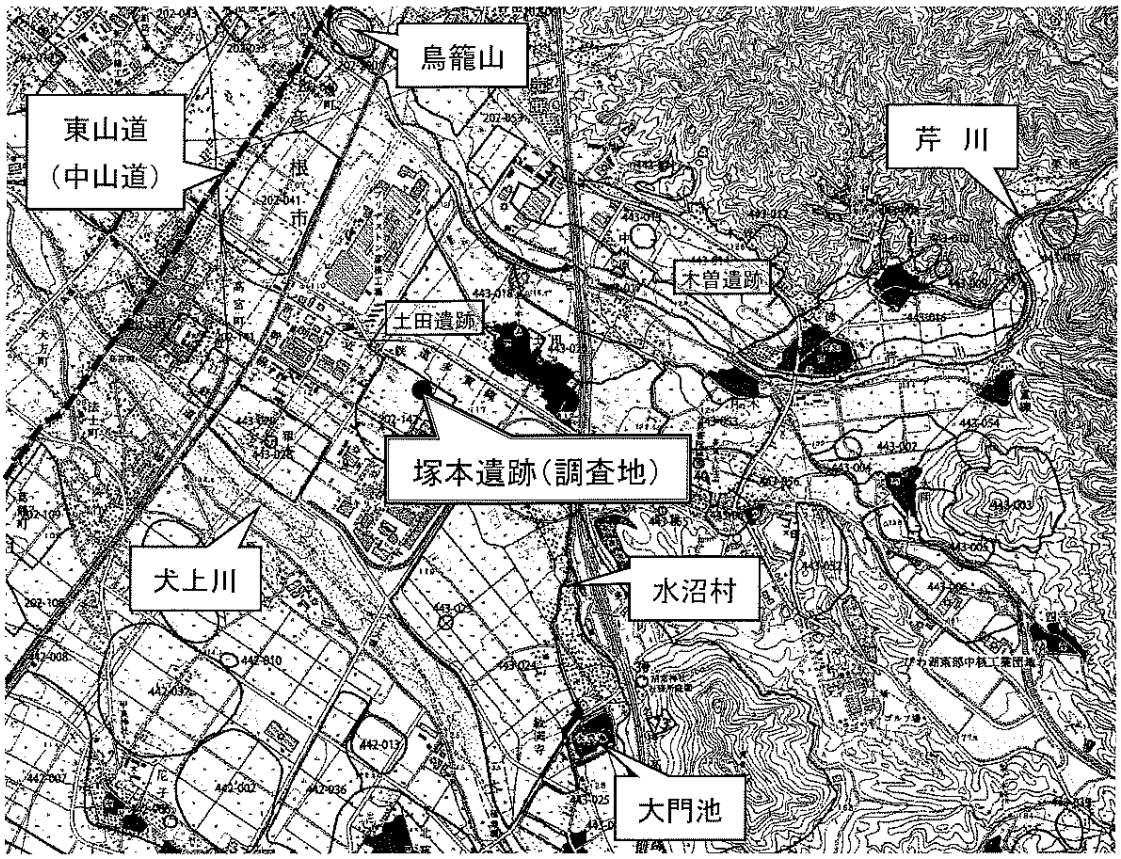
写真４　須恵器出土状況

写真５　土坑出土須恵器

写真６　掘立柱建物の柱穴出土土器

６．塚本遺跡第１・２次調査～犬上川右岸扇状地の開発～

遺 跡 名：塚本（つかもと）遺跡
所 在 地：滋賀県彦根市高宮町　地先
時　　代：弥生時代終末～古墳時代初頭、飛鳥・奈良時代
調査面積：１次調査：１,５００㎡
　　２次調査：３,５００㎡
調査期間：１次調査：令和２年１１月～令和３年３月
　　２次調査：令和３年１０月～令和４年３月
調査原因：資材置き場造成工事
調査機関：彦根市
報告者名：林　昭男



遺跡の位置（1/25,000）

１．調査の経緯

塚本遺跡は、犬上川右岸扇状地の扇央部、彦根市東部の多賀町との市町境付近に位置する遺跡です。これまで、本発掘調査が実施されたことはありません。今回、民間の資材置き場造成工事に伴い試掘調査を実施したところ、遺構・遺物が確認されたため、記録保存を目的とした本発掘調査を実施しました。昨年度に１次調査（約 1,500 ㎡）を実施し、今年度は、南西隣接地で２次調査（約 3,500 ㎡）

実施しております。今回、１・２次調査成果を一体として纏めて報告します。報告は令和４年１月末時点での調査成果についての中間報告となります。今後、現地調査・整理調査の進展に伴い、遺構の時期や評価について、一部変更・修正される可能性がありますことをご了承下さい。なお、本報告では遺構番号なども、１次と２次で分けずに通し番号で付与します。

２．遺跡の概要

彦根市域の平野は、芹川、犬上川、宇曽川、愛知川の四河川による堆積で形成されています。その中でも、犬上川、愛知川の堆積作用はきわめて大きく、大規模な扇状地を形成しています。扇状地は、主に砂礫層で構成されているため、川の水は地下にしみこんで伏流水となり、地表の流路は涸れ水となっていることが多いです。特に、塚本遺跡が位置する扇状地扇央部は、地下水位が極めて低いため、飲料水や灌漑用水の確保が難しく、一般的に開発が困難な地域と言えます。

塚本遺跡の周囲の状況ですが、北東部に芹川、南西部に犬上川が流れており、北西約 1.5 ㎞には、古代幹線道路である東山道と鳥籠駅比定地の鳥籠山（大堀山）が位置します。南東約 1.5 ㎞には、所謂初期荘園（古代前期荘園）と呼ばれる東大寺領水沼荘（水沼村）の比定地が位置します。これは、東大寺正倉院に残されていた近江国水沼村墾田地図に描かれたもので、その比定地が現在の多賀町敏満寺周辺と考えられています。その絵図に記された天平勝宝３（751）年の記載により、当該期には東大寺領の荘園として開発されていたと考えられています。塚本遺跡の市町境を挟んだ北東隣接地には多賀町土田遺跡がひろがっています。これまで、多賀町教育委員会などにより複数回の発掘調査が実施されておりますが、その調査成果によると、縄文時代晩期（B.C1000）の墓跡、弥生時代後期の直線溝、弥生時代終末～古墳時代初頭の竪穴建物などが確認されています。また、平安時代の９世紀中葉の遺構・遺物が多数検出され、その中には円面硯や石帯など官衙施設に関係する遺物も出土しています。少し離れますが芹川の右岸に位置する木曽遺跡では、弥生時代終末～古墳時代初頭の竪穴建物が複数棟検出されており、その内の１棟から鏡が出土しています。また、６世紀後半～７世紀前半の大壁建物が複数棟確認されており、その建物形態より渡来人との関わりが推定されています。同時期の灌漑用水路と考えられる溝も確認されています。

上記のような歴史的環境を有する塚本遺跡ですが、今回の１・２次調査では、扇状地という開発が困難な地域で、開発に取り組んだ先人たちの努力の一端が見えてきました。

３．調査成果の概要

現在までのところ、概ね４時期の遺構を確認しています。以下に、時系列で主な遺構・遺物の概要について記述します。

（１） 弥生時代終末～古墳時代初頭以前の状況

① 自然流路

１次調査区の中央で東西を横切るように砂礫層がひろがっています。これは自然流路または河川の氾濫に伴う堆積層と考えられます。人口的な遺構ではありませんが、本当にわずかですが縄文時代の遺物（縄文土器・石器）が含まれています。

（２）弥生時代終末～古墳時代初頭の遺構

① 竪穴建物

弥生時代終末～古墳時代初頭の竪穴建物が４棟検出されています。比較的に残りの良かった竪穴建物１と４を見ると、平面形が一辺約５～７ｍの隅丸方形で、内部の状況は、竪穴壁面沿いに壁溝が廻っており、主柱穴と方形の土坑も確認されています。また、中央付近の床面は堅く焼き締められており、煮炊きなどを行った炉があったと考えられます。これら竪穴建物の規模・形態は、隣接地の土田遺跡における同時期の竪穴建物と同様のものであります。

出土遺物は、古式土師器が出土していますが、竪穴建物２では器台が纏まって出土しています。

② 掘立柱建物

１次調査区で掘立柱建物１を、２次調査区で掘立柱２・３・４を検出しました。遺物が出土しておらず、一部未掘削のため、現在のところ詳細な時期は不明ですが、掘立柱建物１が溝１に切られていること、建物の方位、柱穴の埋土等より、概ね竪穴建物１～４と同時期と考えています。

（３）飛鳥・奈良時代の遺構

① 溝（灌漑用水路）

調査区全域で、飛鳥・奈良時代の８条の溝（溝１～溝８）を検出しました。その規模は、以下のとおりです

溝１：長さ約 90m以上、幅約 1.8～2.5m、深さ約 0.8～1.3m
溝２：長さ約 90m以上、幅約 0.7～1.5m、深さ約 0.3～0.4m
溝３：長さ約 30m以上、幅約 1.2～1.7m、深さ約 0.6～0.7m
溝４：長さ約 20m以上、幅約 0.4～0.5m、深さ約 0.3～0.4m
溝５：長さ約 15m以上、幅約 0.4～0.5m、深さ約 0.1～0.2m
溝６：長さ約 12m以上、幅約 0.8～1.2m、深さ約 0.1～0.2m
溝７：長さ約８ｍ以上、幅約 0.5～1.6m、深さ約 0.1～0.2m
溝８：長さ約２ｍ以上、幅約 0.5～0.7m、深さ約 0.1～0.2m

溝１・２、溝３・４、溝７・８は、それぞれ大小の２本の溝が並行して走っているのが特徴的です。溝１・２は、90m以上並行して伸びる直線溝で、溝３・４は緩やかに西方に分岐していく溝、溝６．溝７・８は直線溝１・２に並行して走る溝です。いずれの溝も、下層には砂礫が堆積していることより、多量の水が流れていたと想定され、その用途は灌漑用水路と推定しています。また、底部が東方から西方に下がっていくことより、同方向に水が流れていたと考えられます。

出土遺物は、縄文土器や石器、古式土師器や土師器、須恵器です。須

恵器は7世紀後半から8世紀前半のものであるため、これらの溝は概ね７世紀後半から８世紀前半には機能していたものと考えられます。

② 竪穴建物

２次調査区で竪穴建物と想定される遺構（竪穴建物５～７？）を検出しました。本資料作成時には、未掘削であるため詳細な時期は不明であるが、建物軸が直線溝１・２と同方向であるため、現段階では概ね同時期前後と想定しています。

（４）溝１～８（飛鳥・奈良時代）以降の遺構

① 畦畔遺構

１次調査区で畦畔遺構１を確認しました。幅約1.5m、高さ約0.1m、東に約 33 度傾いた東西方向に伸びる畦畔です。犬上郡における条里地割が東に 31～34 度傾いた方位の地割群であるため、それに方位的に合致する畦畔と言うことができます。ただし、出土遺物がないため、溝１・２との切り合い関係により、同溝廃絶後以降という以外、詳細な時期は不明と言わざるを得ません。

また、２次調査区で畦畔遺構１から南西約21mの位置で畦畔遺構２が確認されました。畦畔遺構１と同方向に敷設されていますが、遺物などは出土していないため、詳細な時期は不明です。

② 柵

畦畔遺構２に並行する形で柵１が確認されています。位置関係より、これらは一体のものと考えられます。柵を構成する柱穴からは遺物が出土していないため、詳細な時期は不明です。

４．まとめ

今回、開発困難地域である塚本遺跡において、開発の様相の一端が見えてきました。弥生時代終末から古墳時代初頭の建物遺構、飛鳥・奈良時代の直線溝、詳細な時期は不明ながら犬上郡条里地割の方位に沿った畦畔遺構の検出は、当該地の開発動向と実態を検討する上で、重要な調査成果と言えるでしょう。ここでは、特に飛鳥・奈良時代の直線溝について、若干の検討を加えることでまとめに代えたいと思います。

河岸段丘面や扇状地における古代の耕地開発には、主に二つの方法がありました。

一つ目は、長距離水路による灌漑です。代表的な事例としては、大阪府の古市大溝や京都府の松室遺跡、県内においては、芹川右岸の木曽遺跡や犬上川左岸の下ノ郷遺跡などの事例を挙げることができます。松室遺跡はやや時代を遡るようですが、他の事例は、7世紀～8世紀前半頃に開削されたと考えられています。

二つ目は、溜池による灌漑です。代表的な事例としては、大阪府の狭山池、県内では八日市の布施溜や吉住池などの事例を挙げることができます。狭山池は7世紀頃、県内の2事例は8世紀頃と考えられています。

それでは、塚本遺跡が位置する犬上川右岸はどのような耕地開発が行われたのでしょうか。まず、史料となるのは前述した近江国水沼村墾田地図です。これ

は、現在の犬上川右岸多賀町敏満寺周辺を比定地とする東大寺領水沼荘（水沼村）を描いたものです。その記載より勝宝３年（751）年の状況が描かれているということが理解されます。そこには、溜池である水沼池（現在の大門池）と耕地を横断する長距離水路（現在の二ノ井）が描かれています。すなわち、８世紀中葉の段階には、少なくとも水沼荘（水沼村）域では、溜池（水沼池）と犬上川から直接取水する長距離水路の二つの方法のどちらも用いた耕地開発が行われていたことが確認できるのです。ただ、絵図のみでは、この耕地開発がいつ頃から行われてきたのか、溜池（水沼池）と長距離水路の前後関係の有無、また水沼荘（村）域外の犬上川右岸の耕地開発の状況など解決しなければならない課題も多く残されています。

これまで犬上川右岸では、これらの課題を補う発掘調査の事例にあまり恵まれていませんでした。今回、水沼荘（水沼村）域外の塚本遺跡の調査により、検出された長距離水路が、絵図を遡る時期、少なくとも７世紀後半～８世紀前半には開削されている状況が確認されました。また、水路の位置・敷設方向、水流の方向などより、取水元が犬上川とは考えづらく、芹川ないし埋没した旧河道であった可能性がきわめて高いと考えられます。さらに、大小２本の並行する直線溝、その直線溝が等間隔で敷設された状況は、当該地の耕地利用の具体的な姿を検討する好材料となるでしょう。そのように考えると、同じ犬上川右岸でも、その耕地開発の実態は多様であった状況が浮かび上がってくるのです。

５．今後の課題

今回の調査は、長らく停滞気味であった犬上川右岸扇状地の耕地開発の実態を検討していく上で、大きな調査成果と言えます。今後、残りの現地調査（令和４年度に３次調査実施予定）やその後の整理調査などを通じて、より具体的な開発の変遷や耕地開発の実態を検討していく必要があります。また、耕地開発の実態が明らかになるにつれて、それらの大土木工事を行った開発主体の問題もでてくるでしょう。長距離水路が掘削される地域は、渡来系氏族の分布の濃い地域とも言われています。塚本遺跡が位置する犬上川扇状地は、画師として知られる簀秦氏が開発にあたったものと推定され、近隣の芹川右岸の木曽遺跡では、渡来系氏族との関わりが推定される大壁建物が検出されています。これらの渡来系氏族と耕地開発との関わりも今後検討していかなければならない課題と言えます。今後も、地道な調査・研究を進めていきたいと思います。

最後に、上述したように塚本遺跡が位置する扇状地扇央部は、地下水位が低いため、飲料水や灌漑用水の確保が難しく、一般的に開発が困難な地域と言えます。そのような、開発が困難な地域にも関わらず、現在犬上川流域の扇状地一体は広大な水田が広がっています。これらの豊かな水田が広がる美しい景観は、開発困難地域に果敢に挑み、地道に水を引き、開墾を続けた先人たちの努力の賜物であるということを今回の調査を通じて強く感じました。

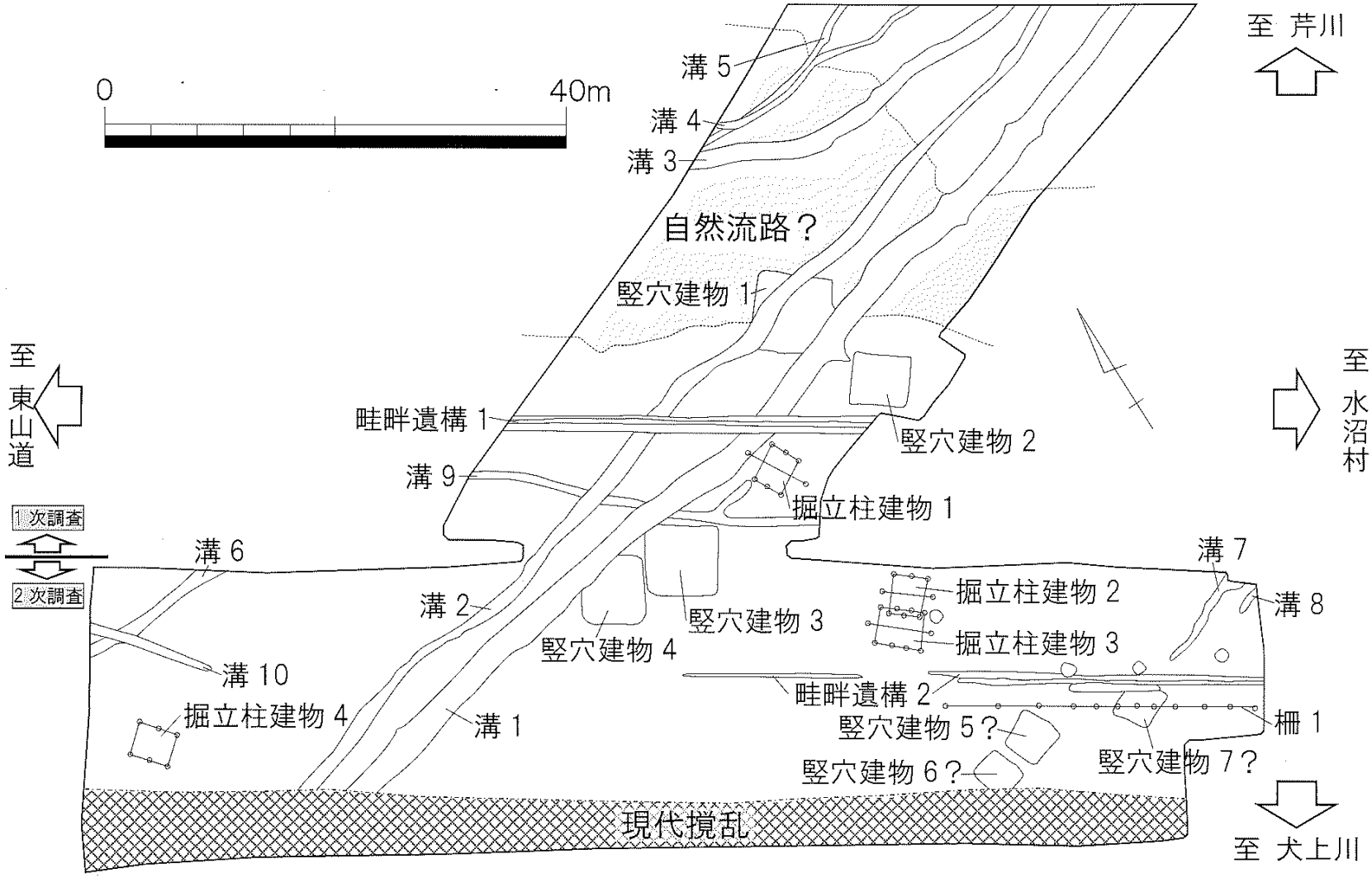

0
40m
溝 5
溝 4
溝 3
自然流路？
竪穴建物 1
至 芹川
至 東山道
至 水沼村
畦畔遺構 1
竪穴建物 2
溝 9
掘立柱建物 1
1 次調査
2 次調査
溝 6
溝 7
溝 8
溝 2
竪穴建物 3
竪穴建物 4
掘立柱建物 2
掘立柱建物 3
溝 10
畦畔遺構 2
掘立柱建物 4
溝 1
竪穴建物 5？
柵 1
竪穴建物 7？
竪穴建物 6？
現代撹乱
至 犬上川

図１　主要遺構概略図

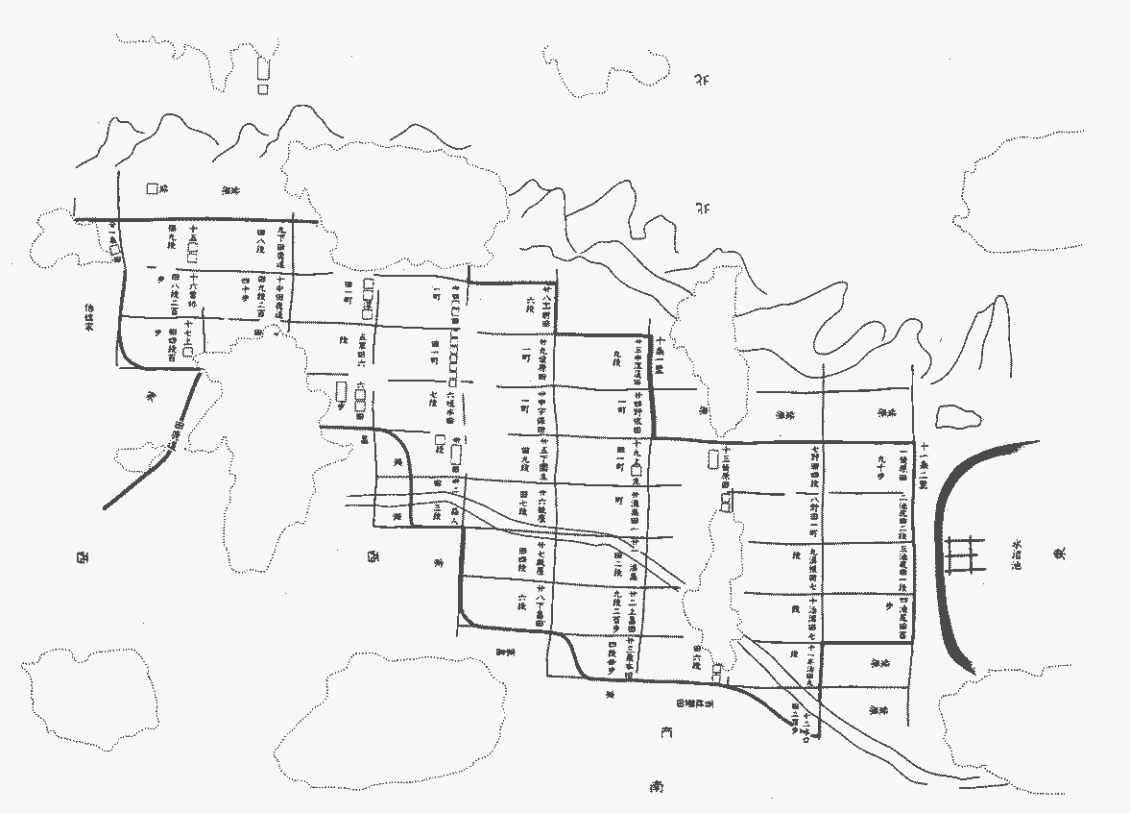


図２　水沼村墾田地図　トレース図（佐藤 1996 より転載）

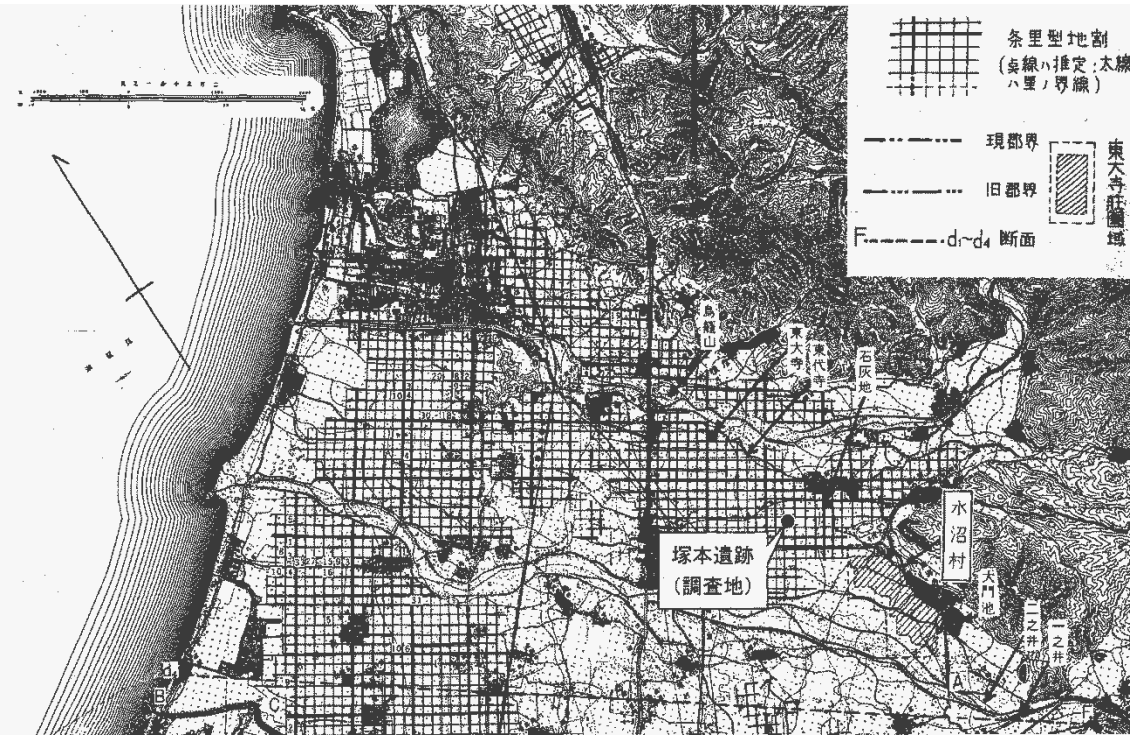


図３　犬上川扇状地の条里地割と塚本遺跡（『彦根市史』（上冊）の図に加筆）

写真１　１次調査区全景（北西から）

写真２　竪穴建物１（１次調査区：北東から）

写真３　竪穴建物２（１・２次調査区：北東から）

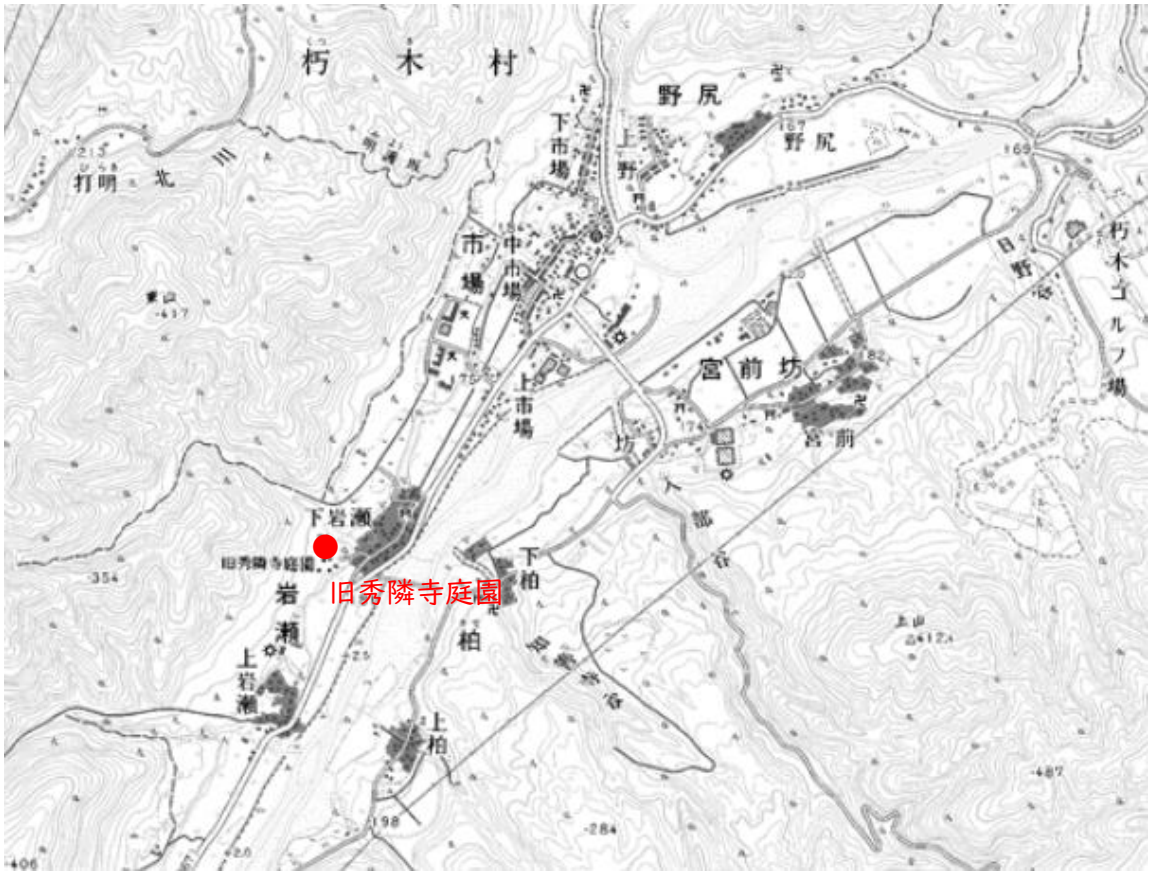
写真４　掘立柱建物１（１次調査区：南東から）

写真５　溝１・２（１次調査区：南西から）

写真６　溝１・２（２次調査区：南西から）

７．名勝 旧秀隣寺庭園の石組み桝の発掘について

遺 跡 名：旧秀隣寺（きゅうしゅうりんじ）庭園
所 在 地：滋賀県高島市朽木岩瀬 374 番地（興聖寺境内）
時　　代：室町時代後期
調査面積：１００㎡
調査期間：令和３年９月１日～令和３年１２月２８日
調査原因：庭園修理に伴う発掘調査
調査機関：高島市教育委員会
報告者名：宮﨑　雅充



遺跡の位置（1/25,000）

調査の概要

旧秀隣寺庭園は、現在の興聖寺境内の一画に所在します。安曇川によって形成された河岸段丘に位置し、北側は「小彦谷」と呼ばれる谷が存在します。庭園は段丘の縁にあり、眼下に流れる安曇川と対岸の集落を見下ろし、その背後の蛇谷ケ峰を遠くに望むことができる立地にあります。庭園東側の眼下には「若狭街道」（通称：鯖街道）が通り、西側の背後には「朽木氏岩神館遺跡」（以下、「岩神館」とする。）の遺構である土塁や空堀の一部（東西 120m×南北 160m）が現存しています。

旧秀隣寺庭園が所在する朽木岩瀬は、明治 7（1874）年に「穴瀬」と合併するまで「岩神」と呼ばれ、かつて朽木氏の惣領が住む岩神館（上殿）があったとされる場所です。岩神館が造られた詳しい年代は不明ですが、朽木氏の拠点が、岩神館から安曇川下流の館（下殿：後の朽木陣屋跡）に移ったとされる 15 世紀前葉頃まで存在したと考えられています。

享禄元（1528）年に、室町幕府 12 代将軍足利義晴が、三好氏らの権力争いによる京都での兵乱を避け、朽木稙綱を頼って身を寄せた際に、「岩神館」に造られた庭園が旧秀隣寺庭園です。

元禄 2（1689）年の『西北紀行』と呼ばれる記録には、「周林院とて禅寺あり（略）、方丈の前に假山水あり、後奈良院享禄元年、将軍足利義晴、三好が乱を避けて京を出奔し、朽木に来り、朽木民部少輔植綱が許に住居せられ、5 年を歴て天文元年、朽木より帰京せらる、此寺は義晴の居住し給ふ宅なり、假山は即義晴みづから築かれしと云う、物菖りて今めかしからず、其製巧なり」と記されています。

室町幕府 12 代将軍足利義晴は、享禄元年 9 月～4 年 2 月（1528～1531）までの 2 年半ほど朽木に滞在していたことから、庭園の作庭が義晴の滞在中であったとされる有力な根拠となっています。また、第 13 代足利義輝も、天文 20 年 2 月～21 年 1 月（1551～52）、天文 22 年 8 月～永禄元年 3 月（1553～1558）の計 5 年半にわたり岩神館に滞在するなど、この庭園が「足利庭園」と呼ばれる由縁になっています。

なお、旧秀隣寺庭園の名称は、慶長 11（1606）年に朽木宣(のぶ)綱(つな)により岩神館の跡地に秀隣寺が建立されたことによります。享保 14（１７２９）年には、安曇川対岸の上柏にあった朽木氏菩提所の興聖寺が、秀隣寺があったこの地に移り現在に至ります。江戸時代に秀隣寺の庭園であったことから、現在、興聖寺にある庭園を旧秀隣寺庭園とよんでいます

特徴　庭園は、左手奥の築山に組まれた滝石組から流れ出る水が池に注ぎます。その汀線は出入りが多く複雑な形状を呈し、大小の石で組み合わされた枯滝、滝石組、中島（亀島と鶴島）の他、２カ所に石橋が存在するなど、随所に豪快な石組が配される池泉庭園です。鑑賞としての庭園機能だけではなく、将軍の権力等を示すための儀礼的な場としての役割も担っていたものと考えられています。

遺構

池護岸や滝石組の修理に伴い池の発掘調査を実施し、池底から新たに長方形の石組み桝を検出しました。石組み桝は、池の堆積土を除去（浚渫）した池底から検出し、その規模は南北約 1.3m、東西約 0.8m、深さ約 0.35mを測ります。池底の地山を掘り込んだ後、幅約 0.2m、厚さ約 0.1mの川原石を 2～3 段ほど積み上げ構築しています。

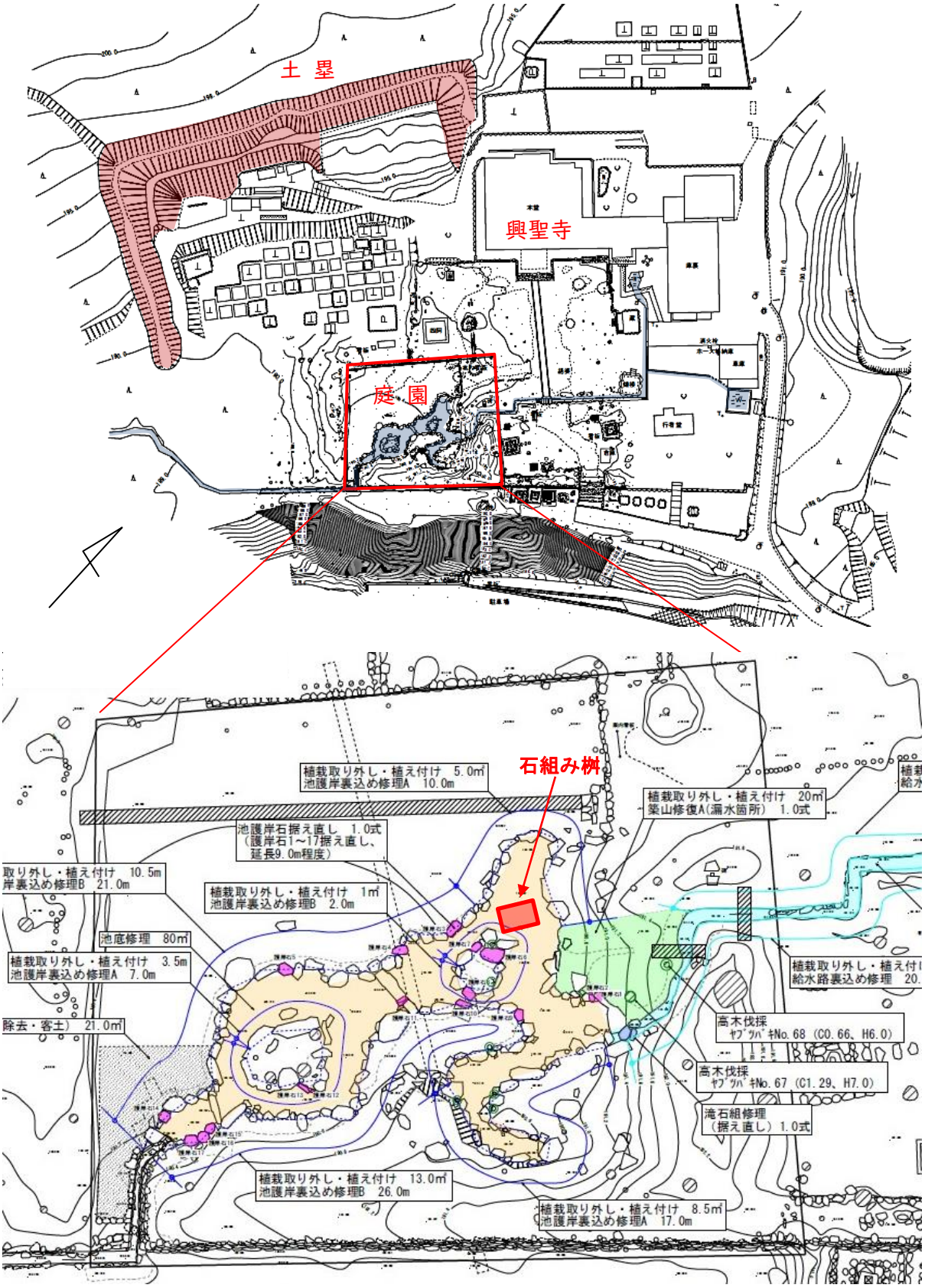
石組み桝の機能は、滝石組から流れてきた池の水が最も屈曲しながら流れる箇所に築かれていることから、池の水に含まれる泥を沈殿させ、清浄な水を流す「泥溜め」（滞水浄化）としての性格が考えられます。大きな流れを特徴とし、随所に豪快な石組が配される地表の庭園に対し、表に出てこない池の中でも丁寧な庭づくりが施されていることが明らかになりました。常に清浄な水を保ち

ながら、庭園を愉しむ工夫が行われていたものと考えられます。

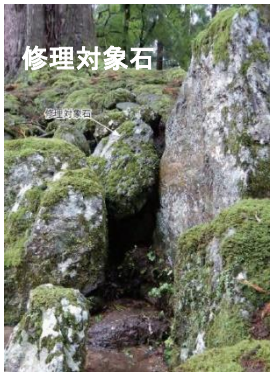
修理工事では、滝石組、池護岸石組、給水路とそれに伴う築山の修理を行いました。滝石組は「鼓の滝」と称され、本来は滝石組から水を落とす給水施設でしたが、木根の影響により池への給水が絶たれ、本来の流れとは異なる場所から漏水が発生し、流水により築山が浸食されていました。発掘調査の結果、給水路に敷設されていた石組は、木根や後世の改変により存在しないことが確認されたことから、この給水路については、新たに石を補充して水路を構築すると共に、築山の地形修復を行いました。この他、護岸石組などが傾倒するものについては、古写真との比較や、発掘調査による旧位置や据付面の状況確認を行い、元の位置へ据え直すなどの修理を行いました。

今回、庭園作庭以来初めてとなる本格的な修理が行われ、これに伴う発掘調査を行いました。修理により適切な保存継承が図られたほか、庭園の石組と調和させながら見えない細部にわたり清浄な水を保つための機能的な「石組み桝」が構築されるなど、その当時の作庭の創意と工夫を感じることが出来る発見となりました。

石組み桝と庭園全景
（左：池浚渫後・右：浚渫前）



上：興聖寺境内図・下：庭園測量図（整備計画図）



滝石組（左：昭和 12 年・右：修理前）

石組修理の様子

給水路修理の様子　（左：修理前・右：修理の状況）

築山修理の様子　（左：修理前・右：修理の状況）

中島（亀島）修理の様子　（左：昭和 12 年　右：修理前）

令和３年度滋賀県埋蔵文化財発掘調査成果報告集
土の中から歴史が見える 2021
―最新の発掘成果から―
（第 117 回滋賀県埋蔵文化財センター研究会）

令和４年（2022 年）３月１日発行

編集：滋賀県埋蔵文化財センター
大津市瀬田南大萱町 1732-2
TEL：077-548-9681

※当資料集に掲載した写真等の無断転載は禁止します。
各調査機関にお問い合わせください。